栃木医療センター 広報誌

No,48　2022　January

理　念

信頼　貢献　協働

Contents

●年頭のご挨拶 ……1・2
●新型コロナウイルス感染症の感染対応を振り返って …3・4
●救急車紹介 ……5
●連携医紹介
（医療法人社団しののめ　さいとうクリニック） …6
●マイナンバーカードによる保険証の認証／交通のご案内…裏表紙

独立行政法人国立病院機構　栃木医療センター

2022年
年頭のご挨拶

院長　田村　明彦

　あけましておめでとうございます。何とか無事に2021年を乗り越えられたことを皆様に感謝いたします。昨年はコロナ第三波五波と大変な年でした。それでも、医学的な面では有効なワクチンが開発され、治療法もある程度確立してきました。受け入れ態勢面では、保健所、市、県、医師会、重症対応医療機関との連携も良好になってきました。波のピークの時は大変でしたが、地域全体が一つの大きな医療機関の様に機能するようになった印象です。あと何波くるかはわかりません。一年後はどうなっているかもわかりません。少なくとも今年もコロナ対応は重点の一つと思います。

　院内の感染対策の設備は大体整ってきました。外来の老朽化は深刻ですが、資金に余裕があればコロナ対策の状態なので、残念ながらしばらくはこのままかもしれません。一般診療の遅れを取り戻すのが今後の課題です。がん、脳卒中、心筋梗塞、糖尿病といった五大疾病の対応が遅れた分、進行癌、脳血管障害、糖尿病合併症がしばらくは増加する可能性があります。ピーク時の同時両立は困難かもしれませんが、流行状況を見ながら遅れた分くらいは取り戻したいと思います。

　ピーク時でも救急態勢を維持するのが今年の目標です。救急外来の増築を行い、３テスラMRIが３月には稼働予定です。さらなる診療機能の充実を図って行きたいと思います。

　気が付けば2025年問題はもうすぐ過ぎて2040年問題がやってきます。人口動態の変化に伴う社会の変化は一年単位では実感しにくいものですが、10年前を思い出すと変化しているのを感じます。長期的視野で地域医療を考え体制を整えて行きたいと思います。

　寅年は伸びる年といわれます。昨年やりきれなかったことを一つずつ達成して行きたいと思います。本年もよろしくお願いいたします。

副院長　石原　雅行

新年あけましておめでとうございます。昨年１年を振り返りますと、ちょうどコロナ禍第３波で始まり、年初から病院は大混乱であったことを思い出します。毎日、病院内外で対応検討を行い、解決の糸口を模索しシステム構築を行ってきました。８月の第５波は、第３波を大きく上回る大きなものでしたが、職員の努力に支えられ大変な思いをしながらも秩序ある運営ができたと思います。事後対策に追われていた一時期に比べ、先を読んで対策を立てる余裕が出てきました。言葉を言い換えれば、コロナ禍という負荷によって、病院がトレーニングされ実力がアップした１年であったように思います。何より、病院が地域に求められる使命に向かって、即応できるように変化できる能力がつきました。これは、コロナ禍が落ち着いて少子人口減少が進んで、病院に求められるニーズが変わり続けても対応し続けられる力です。コロナ禍の夜明けにおいて、更なる飛躍の年になりますよう期待して、年始のご挨拶とさせていただきます。

統括診療部長　畠山　直樹

2021年４月１日に統括診療部長に就任しました。当院に泌尿器科医として赴任してから15年が経ちましたが、今日までの間、連携医の先生方には大変お世話になりながら、地域医療に貢献できるよう信頼・貢献・協働という当院の理念のもと泌尿器科診療に携わってきたつもりです。昨年は統括診療部長として泌尿器科のみならず全科を通して、より一層連携医の先生方のお役にたてる栃木医療センターになれるよう励んできましたが、今年も先生方と地域のニーズに応えられるような栃木医療センターを目指していきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

新型コロナウイルス感染症の感染対応を振り返って

感染管理認定看護師　丸山　沙緒里

2020年１月に第二種感染症指定医療機関病院として新型コロナウイルス感染症患者の受け入れを開始しました。多くの陽性者を受け入れてきた中で、「物資」「診療体制」「院内対策」について振り返りたいと思います。

陽性者を受け入れた直後には感染対策に必要なマスクやガウン等の物資が次々と不足し、マスクは４～５日に１枚の配布、ガウンはカッパを代用することとなりました。本来、ガウンは１回毎に破棄しますが、物品が足りなかったため１日１枚の交換となり正しい感染対策が実施できない状況でした。対応に苦慮していたところ、多くの方々から物資を寄付していただき、危機を乗り越えることが出来ました。物資を寄付してくださった皆様には深く感謝しております。

診療体制については、有熱者の外来受診が困難になったため、新型コロナウイルス感染症に関する問診票を作成しました。感染者数が多い時期は、正面玄関にトリアージセンターを設置し、来院する患者・家族の記入済問診票を確認し診療場所の割り振りを行いました。発熱や咳などの症状がある方や流行地域から来た方は新型コロナウイルス感染症に罹っている可能性を考え、一般外来ではなく有症外来へ案内しました。有症外来はガウンや手袋、N95マスク、フェイスシールド等を着用した職員が対応しました。自力歩行が可能な患者は非接触で診察が出来るタブレット外来に案内しました。現在も診療する場所を分け、来院する患者や職員の安全および安心できる環境づくりに努めています。

受け入れ当初、職員は新型コロナウイルスの感染経路が不明だったことや未知のウイルスによる恐怖を感じていました。「自分が家に帰る事で家族にうつしてしまうのではないか」という不安の声も聞かれました。それでも、使命感を持って病気に罹患した患者の医療を行いたいと奮闘していました。新型コロナウイルス感染症に関する手順書を作成し、病院全体で新型コロナウイルス感染症に対する感染対策の取り組みについて会議を行いました。そこで、栃木県の警戒度レベルに合わせて院内の感染警戒度レベルごとの感染対策（新型コロナウイルス感染症流行期BCP）を考え、流行状況に合わせて実施しました。新型コロナウイルス感染症の感染経路や治療が明らかになるにつれ、院内の対策も変更しました。現在もBCPや手順書を共有することで、職員が新型コロナウイルス感染症の感染対策で不安を感じたときには、いつでも確認できるようになっています。

新型コロナウイルス感染症の大きな波を何度も経験し、第３波は陽性者の受け入れ人数が多く、一部の高齢者は重症化しました。その後、新型コロナウイルスワクチンの普及により徐々に重症化する患者層が変わりました。新規感染者数が増えたことにより宇都宮市でも自宅療養者が増加しました。栃木県対策本部や保健所、近隣医療機関と連携し、入院の受け入れミーティングを行い、入院が必要な患者をタイムリーに割り振り、治療を必要とする患者を速やかに入院へつなげることができました。第５波は、さらに陽性者数が増加し、第３波と同様に地域と連携しました。新しい点滴治療（抗体カクテル療法）も積極的に行いました。感染が拡大するにつれ、

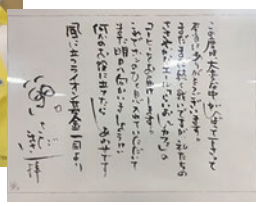
職員の家族など身近な方が濃厚接触者になるケースが増加したため、職員の健康管理を強化しました。従来行っていた毎日の検温はもちろん、感冒症状がある職員に関しては各部署長から感染制御チームへ連絡をもらい、就業制限をお願いしました。また、家族など身近な人が検査を受けた場合、必ず感染制御チームへ連絡をもらい状況の確認を行いました。職員一人ひとりが自覚を持ち行動したことで院内クラスターを発生することなく、第５波を乗り越えることが出来ました。

これからも新型コロナウイルス感染症はなくなりません。新規感染者数の変動はありますが、同じ状況が続くと思います。日々地道に感染対策を行い、今後も必要な医療を提供したいと思います。

病棟の様子。防護服を着用して患者さんの対応に当たります。

陰圧式ストレッチャー：動けない患者さんはこちらで病室まで運びます。

玄関前に「トリアージセンター」を設置、職員総出で来院される方すべての健康状態等をチェック、感染防止に努めました。



さだまさしさんが設立した「風に立つライオン基金」他、こちらに掲載されているもの以外にも、様々な団体、企業、個人の方々から励ましのお言葉と寄附を戴きました。

病院救急車が配備されました！

栃木医療センターに「病院救急車」が配備されました！
DMAT（災害派遣医療チーム）を被災地に派遣したり、患者さんの転院搬送に活躍する予定です。

転院搬送車として

● 従来、病院から病院へ患者さんを搬送する「転院搬送」は消防局の救急車に依頼していましたが、比較的緊急性の低い患者さんを「病院救急車」で搬送することで、消防救急の負担を少しでも減らそうというねらいがあります。

（左上）（上）
車両としては消防救急車とまったく同じなので、見分けがつきやすいように赤と青のラインでカラーリングしています。

（左）
担架などの車載設備もほとんど消防救急車と同じです。

DMATカーとして

● 栃木医療センターは栃木県の“地域災害拠点病院”に指定されており、その役割として、大規模な災害が発生した際にDMAT（災害派遣医療チーム）や国立病院機構の初動医療班・医療班を被災地に派遣して、被災者等の診療を支援します。病院救急車はDMATや医療班を被災地に運ぶ「DMATカー」としても活用されます。

緊急走行もできます

● 当院の「病院救急車」は、普通の救急車（消防救急車）と同じように、赤色灯を回しサイレンを鳴らして走行（緊急走行）が可能な“緊急自動車”として正式に届け出ています。もし宇都宮市内で見かけることがありましたら、手を振って応援してください。

医療法人社団しののめ　さいとうクリニック

院長　足立　武則

当院は1994年に宇都宮市駒生の地に、私の大学医局（千葉大学第一外科・現臓器制御外科）の先輩である故齋藤滉先生が開設したクリニックです。齋藤先生は心血管外科が専門で、その経験を生かし、循環器を中心に広く診療されていたようです。その先生が体調を崩されて、急遽（？）私が当院に赴任してから約５年が経過し、現在は足立が週に４日間、齋藤医師（現理事長）が週１日という診療体制となっています。

私は1981年に千葉大学を卒業し、その後は外科医師として主に癌の手術に携わってきました。前勤務の病院でも、外科医　麻酔科医　救急医　として働く毎日を過ごして参りました。ただ、いつかはもっと人に身近な町のお医者さん、かかりつけ医として仕事をしたいと考えていたので、さいとうクリニックへの赴任はまさに好機といえました。

しかし、当初は病院での診療とクリニックでの診療の違いに戸惑う日も多く、特に入院治療が出来ない中でどこまで治療すべきか…という葛藤がありました。そんな中、心強い存在であったのが（今でもそうですが）栃木医療センターでした。入院や精査が必要そうな患者さんの相談を受けて頂き、必要に応じて入院治療して頂ける栃木医療センターさんに本当に感謝しています。現在では徐々にクリニックの診療になじみ、自分の性格上少しゆっくりではありますが、外科はもちろん内科　消化器　乳腺疾患など幅広くやりがいを感じながら診療をさせて頂いています。

当院の理念（理想）としましては、とにかく体に関して困っていることは何でも気軽に相談や診療が出来るクリニックであること、です。広くいろいろな症状の方を診察し、疾患や状態によっては患者さんの不利益にならないよう迅速に専門医に紹介することを心がけております。

まだまだ力不足の部分も多く、医療センターの先生方や医師会の先生方にご迷惑をおかけすることも多々あるかと存じますが、理想に近づけるよう努力して参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

ご案内

診療科目　内科、外科、消化器、リハビリ、乳腺、皮膚科

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
9:00 ～ 12:00	●	●	●	×	●	※	×
15:00 ～ 18:00	●	●	●	×	●		×

※土曜日の診察はお昼休憩なしで9:00 ～ 15:00　　※木曜・日曜・祝日休診
乳腺外来・胃カメラ・エコーについてはお電話にてご確認をお願いいたします。
診察医師　（月、水、金、土）足立、（火）齋藤

〒320-0065　栃木県宇都宮市駒生町1359-25　　TEL 028-652-6333

2021年
10月20日

“マイナンバーカード”を健康保険証の代わりに使えるようになります。

10月20日（水）より、栃木医療センターでは健康保険証の代わりにマイナンバーカードで保険資格の確認ができるようになります（「マイナ受付」）。

マイナンバーカードを健康保険証の代わりに利用すると、次のようなメリットがあります。

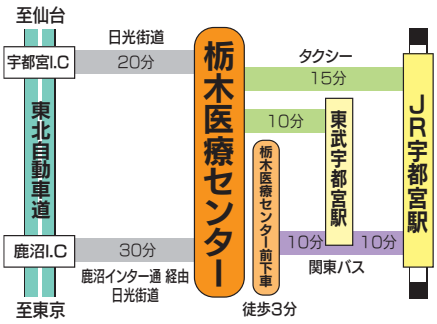
①就職や転職で健康保険証が変わっても引き続きマイナンバーカードを健康保険証として使用することができます。
②［マイナポータル］（ウェブサイト、アプリ）からご自身の特定健診情報や薬剤情報、医療費を見ることができます。
③［マイナポータル］から医療費控除の手続きを行うことができます。

※マイナンバーカードを健康保険証の代わりに使う場合は、事前に利用登録をする必要があります。スマートフォンやパソコン（ICカードリーダが必要になります）で登録していただくほか、当院のオンライン資格確認端末（写真）でも登録することができます。利用登録をご希望の方は、マイナンバーカードと暗証番号（数字4桁）をご用意のうえ、最寄りのオンライン資格確認端末設置窓口までお申し出ください。

スマートフォンやウェブサイトからの利用登録手続きについては、［マイナポータル］（ウェブサイト）をご覧ください。

https://myna.go.jp/html/hokenshoriyou_top.html

交通のご案内



発行人
独立行政法人国立病院機構
栃木医療センター
院長　田村　明彦

〒320-8580
栃木県宇都宮市中戸祭1-10-37
TEL. 028-622-5241
FAX. 028-625-2718
URL. https://tochigi.hosp.go.jp/

UD Universal Design Font
◎本冊子はユニバーサルデザインフォントを使用しています。
※ユニバーサルデザインフォント…年齢、性別、障がいの有無にかかわらず、さまざまな人が読みやすく、誤読されにくい書体です。